

特別号

June '92

NEWSLETTER

 神戸女学院大学
 女性学
 インスティテュート


カルチャーイブニング

特集 '91年度AWI教員・学生交換プログラムに参加して

ディスカッション「女性の地位」と「日本に対するイメージ」の司会を通して思ったこと、学んだこと

E4 岩崎明子

私は、AWI(The Asian Women's Institute)交換プログラム初日のディスカッション「女性の地位」と「日本に対するイメージ」の司会をさせて頂きました。初め「岩崎さん、9月27日のディスカッションの司会お願いね」と言われた時は「えっ、この私が?」とも思いましたが、折角のチャンスだと思い、させて頂きました。参加者の

学生、先生方は皆とても積極的に意見を発表して下さい、思っていたよりもずっとスムーズに進み、あっという間に時間がたってしまいました。

「女性の地位」に関しては、日本、レバノン、パキスタン、インド、とそれぞれの国によって違った意見を聞くことができ、とても興味深い討論になりました。遍に「地位」と言っても、その国の社会全体におけるもの、家庭内におけるもの、職業におけるもの、そして宗教におけるものなどあらゆる面から見た意見が出ました。皆の意見を通して思ったことは、これら三国では私が思っていた以上に女性が自立しているということです。そして自立によって、社会における女性の地位も昔のように低

いものではなくはなっている、ということです。しかし、地域や宗教によっては、男女関係において、地位の差とは言わないまでも、男性には自由があるが、女性は結婚する相手以外とは交際することもできない、など差別がある、と不満を表わす人もいて、学生同志ということもあってこんなところで話が盛り上がりもしました。「地位」と一言と言っても話は他方面から進められ、司会の出る幕もない、というほど話は盛り上がりていきました。結局二つ目のテーマ「日本に対するイメージ」については話し合う時間がほとんどなくなってしまったほどでした。

私たち日本人にとって一番身近であるはずのアジア諸国。にもかかわらず、ヨーロッパやアメリカには関心、知識をもっている、すぐ隣りのアジア諸国についてはあまりよく知らない、という人が多いのではないのでしょうか。正直なところ私もそのうちの一人でした。しかし、今回このディスカッションを通して少しでもお互いの国について理解することができたように思います。これだけの意見交換で理解というのは少し言いつぎのような気もしますが、少なくともこのディスカッションを通して以前よりもずっと関心が深まったように思います。これを機にこれからも増々相互理解を深めていきたいと思えます。今回はこのような機会を与えられ、とても貴重な体験をすることができました。

酒蔵を出ると、次はポートタワーに上りました。ポートタワーからは、神戸が一望でき、あれは何だ、これは何だと30分程眺めていました。山を背に建ち並ぶビルと足もとに広がる海と、彼女らの目にはどう映るのだろうかと思って尋ねてみると、インドから来ていた学生は、意外にあっさりと、インドにも神戸に似た町がある、と話してくれました。

観光に出かけた27日は、台風の接近にともない、波がしだいに高くなってきていました。港めぐりの船は、ポートタワーのすぐ下から出ます。船着き場で、出航できるのかどうか心配していますと、私たちの乗る便を最後に運休するというので、無事港めぐりにも行くことができました。神戸港にはたくさんの造船所があり、建造のまっ最中の巨大なタンカーや客船、それに、私は初めて見たのですが、潜水艦がドック入りしていました。水上にもち上げられた潜水艦の姿に少なからず驚きました。船を造るということがどれ程規模の大きいことなのか初めて知り、また、その大きさに圧倒される思いでした。

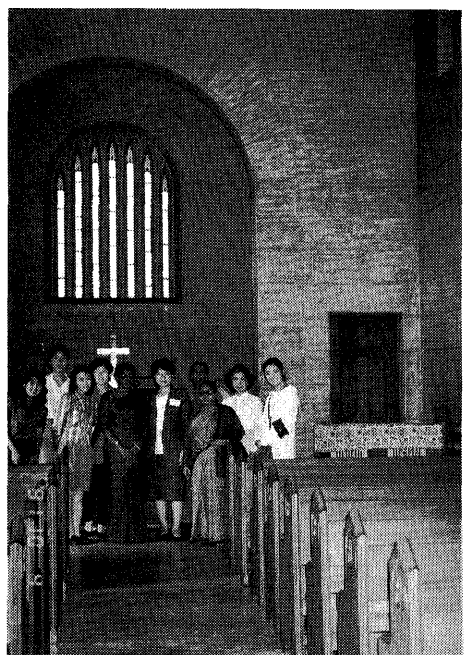
船を降りると、またバスにもどりポートピア・アイランドをくると一周して三宮へともどってきました。この日の観光はこれで終わりました。限られた短い時間でしたので、十分な観光ができなかったのですが、きっと今回、女学院にいらっしやった方々の心に、何かしら残ったものがあつたらうと思います。私にとっても、本当に楽しい、意義のある一日でした。

観光に同行して

E2 武田雅恵

昨年、9月27日に、AWI交換プログラムで女学院に宿泊した方々と神戸市内観光へ行って参りました。私にとっても観光バスに乗って神戸市内を見物するのは初めてのことでしたので、日本にやって来られた方々と同様、大変楽しみにしていました。観光バスは三宮駅を出た所から出発します。コースはいくつかありましたが、私たちの乗ったバスは、三宮→灘の酒蔵→ポートタワー・神戸港めぐり→ポートピア・アイランド→三宮というコースで、3時間半くらいの観光でした。

まず初めの灘の酒蔵では、その古い建物や大きな酒樽をみんなが珍らしそうに見上げていました。お酒造りのビデオもあったのですが、うまく説明してあげられず、とても残念でした。利酒のコーナーがあり、各々が、日本酒の味を試したので日本酒がどんなものであるのかは、わかっていただけました。



ソール・チャペルにて

『自己再発見』

～ディスカッション(環境問題)に参加して～

E3 王 柳蘭

9月28日の午前より文学館1階でAWI交換プログラムの学生レベルの交流の一環である「環境問題」のディスカッションに参加しました。そもそも私がこのプログラムに申し込んだ動機は、従来欧米人と接する機会が比較的多かったのに対し、同じアジア人でありながらその地域の人々とはほとんど交流を持ったことがなかったためです。このチャンスを逃がすわけにはいかないという意気込みとまた、このAWI会議のテーマである環境問題についてのディスカッションということで、私にとっては一石二鳥であったわけです。

ディスカッションは午前10時頃より始まり、出席者は女学院側が学生約20名と先生方、海外参加者側はインド、パキスタン、レバノンからの学生と先生の10名弱程というものでした。まず、環境問題の現状を知る上で助けとなるよう、平井先生(英文学科教授)が持ってこられたマレーシア地域での熱帯雨林伐採に関するビデオを全員でみることでスタートし、続いてそれに対する意見交換が行われました。その中で特に目を見張ったことは、海外参加者側のレバノンから来た一女子学生のディスカッションに対する熱心な取り組み方でした。彼女は事前に下調べしてきたデータ(新聞や雑誌より)や写真が多く盛り込まれた参考文献に基づいて、自らの意見を理路整然と発表するのです。それゆえに説得力があり、加えて英語もネイティブかと思われるほど流暢に話すのを見て、私はまず自分の下準備の甘さ、自分と彼女が同じ学生でありながらありありと分かる格差からくるもどかしさやいかに自分が“井の中の蛙大海を知らず”の格言通りの人間であるかを思い知りました。私自身を含め、女学院側の学生は自らの意見を発表するように求められた時、消極的になり、活発に意志表示をしなかったため、このプログラムはディスカッションという名目のもとにありながら、実質は女学院生が傍聴者と化してしまったといっても過言ではないでしょう。

このように、このプログラムは単に異文化交流やその親睦の役割を果たしただけでなく、私にとっては非常に刺激的で得ることの多い経験となりました。外国の学生を目のあたりにして、自分がまだまだ勉強不足であったと自覚できるなんて、留学でもしないとそう簡単にはありえないでしょう。今後、この素晴らしい経験をステップとし、機会があれば進んで様々な活動に参加し、その中で自分を試し、絶えず向上心を忘れずに生きていき

たいと思います。

料理大会

C4 宮澤陽子

他国の文化を味覚で体験することによって、別の角度からその国々を知る、又知ろうとする機会になればいいなあと思い提案した“お料理大会。”

9月28日のお料理大会に参加した国は、インド・パキスタン・レバノン・そして日本でした。普段私達があまり食べるのでできない国々の家庭料理、これが苦勞した点でもあり、おもしろかった点でもありました。エスニック料理といえば欠かせないスパイス、インディカ米といった日本人になじみの少ないものが多く、材料集めに奔走しました。



料理大会

実習館の台所は、スパイスが入り混ざって独特の香で充満し、つついつつられて台所へ足が向かうのですが、「私達が作るから、隣の部屋で待っていなさい」というメンバーの方々の言葉に甘えて、我々はまるで、お母さんの作る料理を待ち焦がれている子供のような様子でした。

そして、出来上がった各国の代表料理はというと、インド＝チキンババロニ・ヨーグルトサラダ、パキスタン＝シカバブ・チキンコーマ、レバノン＝タブリー(レバノン風サラダ)、日本＝手巻き寿司・筑前煮・わらび餅でした。これらを前にし、パーティーは5時頃から始まりました。私達とは年の差もあり、自国又世界においても有名で威厳ある引率メンバーの方々ということもあって、最初は緊張していた私達も、偉大なる母のような彼女達の魅力に引き込まれて、次第にリラックスし、各国の料理を食べながら、共にソファーに腰をかけ、歌を歌ったり、話をしたりしました。討論会の時のような彼女達の厳しい面とはちがった、普段のままの彼女達の温かさに触れることができたことは、本当に貴重な経験だったと思います。

そして今度は、私がアジアの各国へ絶対に行くゾ!と心に決め、お金をためています。

世の中、そんなには ウマクいかない

I 2 児玉真智子

「やったあ。外国人と話せる。」

そんな単純な思いつきで応募したのがAWI交換プログラムの学生ボランティアスタッフでした。「まあ、少ししかvocabularyはないけど、後は持ち前のbody language & smileでなんとかなるものね」なんて考えていたのが、そもそものまちがいだ。まず私は、アジアからのお客様である彼女達を迎えたとたん重度のショックと落ち込みを味わったのです。それはただ単に自分の能力のなさ、つまりは自分のアホさかげんを思い知らされたからです。だけど、それもそのはず、彼女達はhigher educationを受けた、アジアでも選ばれて来られた才女ばかりだったのだから……（彼女達は、私達にビシバシ色んな質問を投げかけてきました。もちろん英語で「答えることがあたり前」とでもいう風に……）しかし、そんな調子だったのだから、私が彼女達に答えられるワケもありません。情けない、くやしい、はずかしい

……そんな気持ちが後から後からこみあげてくるのでした。「私も英語全然出来ないよ」とっていた友達も、みんな上手く答えているというのに……)

しかし、そんな中でひととき私の中に深く残った思い出であります。それは、それぞれのお国料理を披露し合った料理大会の日のことです。日本からはお寿司に煮しめ、インドからはカレーといったふうに、皆が皆自分の国のお料理をおいしく味わってもらおうと腕を奮って作りました。そこには言葉はいりません。だって、いっしょう懸命、心を込めて作った料理がおいしくないわけがないのです。そう、料理をおいしいと思う気持ちは自然と顔に表われるものなのです。

こうして私は彼女達とmind communicationをとれた喜びと、なんといってもお腹いっぱい色んな国の料理を食べれた幸せに、この学生ボランティアスタッフをしてよかったと、自己満足するのです。そして、この学生ボランティアに参加したことにより、自分の勉強不足を知ることができ、「もっと学ばねば」という思いに強くされたのでした。

AWI交換プログラムに 参加して

E 4 奥本京子

今回AWIの交流プログラムに参加させて頂きアジアの女性達と出会い、色々考える機会が与えられたことを感謝致します。言葉も服装も髪型までも違う人々と、ほんの少しの間ですが接し、地球という大きな枠の中の日本人としての自分を、改めて見つめ直しました。

日本の中では今、国際化の花盛りで、国際的の団体も次々に登場し、活躍しています。相手の国をよく知り良い所を取り入れようとする事は簡単です。特に日本人は、海外諸国に、単に憧れ、その良さにかぶれる傾向がある様に思えてなりません。日本人として、母国の伝統の上に成り立つ今の日本の精神は一体どこにあるのかと不思議に思えます。日本は敗戦後、がむしゃらに西洋の物質的要素を取り入れようと努力し、現在はその意味では成功したといえると思えます。ただ、心残りなのは、その西洋の物質的の社会の裏側にある、そして共存している精神面を正しく理解していないことだと思います。何も、西洋の意識や物の考え方を総て取り入れよ、というのではなく、誇りある日本の伝統的精神の上に、海外諸国の

伝統や意識を理解する、真の国際的精神が欲しいと思うのです。西洋だけでなく、もちろんアジアにも、アフリカにもその他、世界には尊敬し、尊重せねばならない文化的精神がたくさんあります。その中で、日本は、経済だけでなく、意識の面においても、各国から吸収するのみでなく、与えるものをも持っているはずですし、これからの発展させ、持ち続けたいと思うのです。

外国からは、よく『日本たたき』に会います。日本が他国を思いやって誠心誠意、理解しようとする態度を示すなら、そして世界の中の重要な一國、日本なんだという気持ちを持ちさえすれば、少なくとも徐々に変わっていくでしょう。今回AWI会議でテーマになっていた環境問題においても同じことが言えます。ただ一時のブームとしてでなく、自らの問題として、世界の中の日本人として、自分の位置を明確にし、取り組んでいけたらと思います。今回、こうして述べる機会が与えられたことに感謝します



AWI 教員・学生交換プログラム '91.9.26~10.5

神戸女学院岡田山キャンパス訪問 9.26~9.29

9月

26日(木) 到着

27日(金) ディスカッション I

※「女性の地位」

※「日本に対するイメージ」

神戸市内観光

28日(土) ディスカッション II

※「環境問題」

料理大会

29日(日) 日曜礼拝(仁川教会)

AWI神戸会議参加 9.30~10.5

会場：関西学院千刈セミナーハウス(三田市)

テーマ：テクノロジー時代における女性と環境

30日(月) 基調講演

※「種子と大地—女性、生態系、
とバイオテクノロジー」

ヴァンダナ・シーヴァ氏

学長主催歓迎パーティー

能特別鑑賞会

(三田屋本店：三田市)

10月

1日(火) カルチャーイブニング

(日本伝統文化の夕べ)

2日(水) 講演、セッション

3日(木) 講演、セッション

4日(金) 神戸女学院岡田山キャンパス再訪

Free Night (神戸)

5日(土) 出発(フィリピンへ)

〔海外参加者〕

- | | |
|--|---|
| 1. Dr. Nikhat Khan
(教員) | Kinnaird College
(Lahore-PAKISTAN) |
| 2. Ms. Priscilla
Nirmalakumari Daniel
(教員) | St. Christopher's College
of Education
(Madras-INDIA) |
| 3. Ms. Rima Zankoul
(学生) | Beirut University College
(Beirut-LEBANON) |
| 4. Ms. Zanobia Sylvester
(学生) | Kinnaird College
(Lahore-PAKISTAN) |
| 5. Ms. Vinothini Charles
(学生) | Women's Christian
College
(Madras-INDIA) |
| 6. Ms. Sarah Latha
Ignatius
(学生) | St. Christopher's College
of Education
(Madras-INDIA) |



前列(左から) Dr. Khan, Ms. Nirmalakumari Daniel
後列(左から) Latha, Rima, Vino, Zanobia

This Is My Father's World

聴講生 井上怜美

9月29日(日)朝、干刈でのAWI会議に先立ち女学院にいらしていたパキスタン、インド、レバノンの大学教授、学生6名の方々と、仁川教会の聖日礼拝に出席させていただいた。教会の方で、礼拝式順、聖書、賛美歌、そして説教要旨まで英文のものもご用意下さっていた。

この日の聖書はマルコによる福音書7:1~23で、茂牧師(学院チャプレン)が「人間の言い伝えか、あなたの心か」と題してお説教下さった。賛美歌は最初が90番「ここの神のみ国なれば」、二番目が、II篇4番「この世にあかしを立て」、三番目が320番「主よみもとに近づかん」であった。オルガンに合わせて賛美の声は大きく、日本語で、英語で、「ここの神のみ国なれば」「This is my Father's world」と歌う歌声は礼拝堂内に響きわたった。別府先生(英文学教授)がAWI執行委員会の為アメリカへ行かれた時、「This is heaven!」が、パスワードとなったとニュースレター10号('91年3月発行)に書かれていたのをふと思い出した。「私達の汚してしまった地球が、神の国にふさわしいものとなるように」と祈りつつ「This is my Father's world」の歌声が全世界に届けとばかりに歌った。

礼拝後、サンドイッチとおすしを立食パーティー式にいただきながら、歓談に入った。仁川教会には、英語を話せる方が沢山いらして、大変なごやかな雰囲気の中で、しばしの時間を過ごした。私はパキスタンから来ていたZanobiaと主に話をした。彼女は幼時教育やソーシャルワーカーの勉強をしており、日曜日は教会学校の先生でもあったので、教会学校の礼拝の仕方、分級の内容等について、意見を交す事ができた、又、インド、パキスタンの女性が結婚する時持っていくかなければならない持参金について尋ねると、彼女だけでなく、近くにいたDr. Khanやインドから来ていたVinoも一緒に顔を曇らせたのには、心が痛んだ。

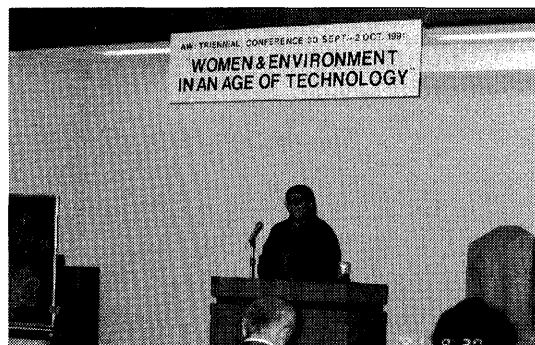
千刈セミナーハウスへの車を待つ間、折り紙を楽しんだ。レバノンから来たRimaはとても器用で、上手にカラーボックスを作り、喜んでた。

キリスト者は、日曜日の礼拝からその一週間を始める。その意味で、彼女達と神の前に共に立ち、礼拝できた事は、とても幸いであった。

ヴァンダナ・シーヴァさんとの出会い

E卒業生('92.3.卒業) 三輪桂子

イギリスでの留学を終えて、帰国してすぐAWI会議のことを聞いた。テーマを聞いて驚いた。私のイギリスの大学院での修士論文のテーマが『環境・開発・第三世界の女性』だったからである。私にこの会議のことを教えて下さった浜下先生(総合文化学科助教授)が、女性学インスティテュートの豊福さんを紹介して下さいました。そして豊福さんにプログラムを見せていただいて信じられない思いだった。というのは、私が論文を書く時に、基盤となる考えを与えてくれた本の一冊「Staying Alive」の著者Vandana Shivaさんが基調講演者だったからで



ヴァンダナ・シーヴァさん

ある。

Shivaさんは私が思い描いていた通りの人だった。知的でかつ優しさに溢れた表情。エネルギーに満ちた声。とても気さくで温かい人柄。物理学博士であり、かつインドの草の根のレベルで木を、自然を、そして人々の生活を守るために闘ってきた彼女の経験と知識の両方に裏付けされた講演は、その著書と同様とても説得力あるものであった。しかし、何よりも印象に残っているのは、彼女の親しみやすく温かい人柄である。私が「論文のことで相談があるのですが」と言うと「いつでもいっしょい」と微笑んで隣の席に座るようにとすすめて下さった。そして私の質問に、明確な答えと力強いアドバイスをして下さいました。文化交流の夜には自ら私達と一緒に踊りながら、「これだけで今日一日が素晴らしい日になる」とおっしゃっていた。

AWI会議の後、私はさらに論文の研究のために11月にアメリカのマイアミで開かれた国連主催のGlobal Assembly on Environment and Womenに参加しShivaさんに再会することができた。顔を見るなり、私のことを覚えて下さっていて「論文はうまくいっている?」と



聞いて下さった。この会議でもあちこちでひっぱりだこの様子だったが、いつもゆったりと微笑みながら力強く発言なさっていた。私は大地のような人だと思った。

日本で環境問題というとは生活の質の問題である。しかし多くの途上国で環境とは人間の生存そのものを左右する。その人々の生活のために、そして地球のためにご自分のエネルギーを注いでいらっしゃるShivaさんに出会えて感銘を受けると同時になぜか勇気づけられる思いがした。

AWI神戸会議に参加して

E2 庄司真子

このAWI会議のボランティアを募集しているのを知り、少しでも英語に触れたいと思い応募しました。

実際にボランティアの仕事をしていろいろな事を感じました。まず第一に文化の違いというものを強く感じました。大半の人はそうではなかったのですが、中には生活様式の違いかボランティアの人達に対してメイドのように接する人がいたことに驚きました。また私達が日本の民族衣装である着物に接するのが少ないのに対し、彼女達は年長者はもちろんのこと若い人達も自分の国の民族性や民族衣装をととても大切にしているように感じました。

いろいろなプログラムがあったのですが、カルチャーイブニングが特に印象に残っています。空き時間を利用してパキスタンの踊りやインドの踊りを教えてもらいました。私達も盆踊りを教えて、一緒に踊りました。その時にサリーを着せてもらったりしたのですが、着物を持っていなかったのが残念でした。華道、合気道、お琴の実演や焼き物などを見ました。また三田屋（三田市）で能を観たのですが、外国の方にとってもまた私にとっても初めての経験でした。日本の文化でありながら、能について何も知らないため質問されても答えることができなかったのが心残りです。もっと自分の国の歴史、文化などに興味を持ち、知ることが大切だと思いました。

最初は英語に触れたいと考えていたのですがいろいろな国の人達と接することにより、自分がいかに自国のことを知らないかということ認識させられました。もっと自分の国のことを知らなければいけないし、また知る努力をしなければいけないということを痛感しました。このAWI会議のボランティアは私にとってとてもよい

経験になりました。

カルチャーイブニング 日本伝統文化の 夕べ

E3 春名美和

AWI会議プログラム二日目のこの「夕べ」は、インド、レバノン、パキスタン、韓国、フィリピンから来られた教員、学生の方々に、日本の伝統文化を知って頂くという主旨で開かれました。まず、本学のクラブがそれぞれ、展示したり、実演したりしました。最初に箏アンサンブル「鶯」が「四季・春」（ヴィヴァルディ作曲）を演奏しました。誰もが知っている曲だったので一層親しみをもって琴の音を聴いていました。合気道会は演武しました。お互いを倒し合い、床の上に「ばん」とたたきつけられる音がする度に、皆圧倒され、「おお」と感嘆の声があがっていました。焼き物倶楽部が作品を展示、紹介しました。次に華道部では生け花を実演し、その後皆に生けて頂きました。皆真剣に生け花に取り組み、出来上がるとお互いに見せ合い、楽しんでいました。最後に、インド、パキスタン、レバノンの学生と私達学生ボランティアが合同で、私達四つの国を取り入れた踊りを披露しました。この為には前もってお互いの国の踊りを教え合いました。その時まず、インド、パキスタン、レバノンの踊りを踊って頂いたのですが、手先を器用に動かせ、踊る様子はとても優美で見とれてしまいました。その後、日本の踊りを踊ってみたいという事になり、今度は私達がみんなで円になり、炭坑節を教えました。炭坑節を英語で教えると、“dig dig push push” となってしまうので、何となくごちがなくて、滑けいでありました。お互いに踊りを教え合う事により異文化に触れ、それを一緒に仕合げようとする事で、より親しくなれて、有意義な時となりました。本番の時には、私達もサリーを着せて頂く事になりました。身にまとう前のサリーは、色鮮やかで豪華な「一枚の布」そのものです。高級なサリーの洗濯は、それを仕事とするのですが、石にばんばんとたたきつける重労働だそうです。本番の踊りが終わると、今まで観客だった方々もみんな仲間入りされて、皆で手をたたき、声をあげて歌いながら踊りました。踊りは、人種や言葉も超えて、いつでもどこでも楽しめます。このように「夕べ」では、日本の文化に接して頂きながら、皆で楽しみ、このプログラムの中でも大変意味深いものとなりました。

AWI交換プログラムに参加して

華道部 F4 宮脇真理子

理学館の掲示板に、AWI会議の学生ボランティア募集要項が貼られてあったのを見て、私はすぐ、これは是非参加してみたいと思いました。今まで日本以外に訪れたアジアといえば台湾のみで、ましてや他のアジア諸国の学生達と交流などしたことがなかったからです。

教室では環境問題や各国の女性問題について討論を行いましたが、インド・パキスタンの学生らが巧みな英会話力を用いて堂々と意見を述べるのには舌を巻きました。

また教会の日曜礼拝にも参加し、おごそかなひとときを分かち合いました。



華道部

カ

ル

チ

ヤ

ー

AWI会議に参加して

箏アンサンブル 鷺 I3 正木縁

はっきりした日付は忘れましたが、昨年、AWI会議に参加してほしいと要請があったとき驚きと不安を感じました。私たちのクラブは2年前に同好会からクラブに昇格したばかりですし、大学の代表として演奏するなんてことは初めてだったのです。また、我がクラブの特徴として、初心者でも入部し、先輩やお師匠に教えていただいているので、お琴を練習できるということがあるので、部員の半数が大学に入ってお琴に触れたという人たちです。大きな不安材料をふきとばしても、AWI会議に参加したのは、「箏アンサンブル 鷺」とはどんなクラブか、そして、お琴という和楽器について知ってもらいたかったからです。

そして、参加することになり、袴などを着て古曲を弾いてほしいという声もあったのですが、私たちのクラブ

それから私は食物学科ということで料理委員の一人に選ばれ、宮澤さんと一緒にメニューを考えたり、材料を調達したりしました。ささやかな料理大会でしたが、皆でワイワイ言いながら各国の自慢料理を作って味わうことができ、何物にも代え難い思い出になりました。

千刈セミナーハウスで催されたカルチャーイブニングには、華道部の一員として参加しました。

まず私達華道部員と先生がデモンストレーションとして生けた花々を会場に運んで行くと、あちらこちらから“How beautiful!”の声があがりました。そしていきなり英語で自己紹介すると言われとまどってしまいましたが、何とか笑顔で切り抜けました。その後身振り手振りを混じえながら基本花型を教え、自由に生けていただく時間を設けました。最初は花鉋を手に首をひねって考え込んでいた学生や教授も、しばらくすると皆思い思いに生け始めました。私のごく乏しい英語力で簡単に指示しただけですが、生けられた多くの花々にはセンスが光っていました。型にはまらず伸び伸びと生け花の醍醐味を味わっていただけたのではないのでしょうか。苦勞してお花や花器を持参した甲斐があり、私自身満足することができました。

短い期間でしたが、このAWI会議への参加が大学生活の大切な一ページとなったことをとても嬉しく思います。

は、ジャンルを問わずポピュラーやクラシックまでをお琴で弾くことが特徴ですので、有名なヴィヴァルティの「四季」から「春」を選び、演奏しました。大勢の人の前での演奏に、部員全員が緊張してしまい、完璧には程遠かったように思いますが、暖かい拍手をいただいて、AWI会議に参加して本当に良かった思いました。

私たちの演奏を通して、日本に古くから伝わる伝統楽器に少しでも興味をもっていただければと思います。



箏アンサンブル 鷺

カルチャーイブニングに参加して

焼き物倶楽部 C2 水口彩子

私達焼き物倶楽部は、4回生と入部したの1回生、2回生を合わせて20人のクラブです。昨年カルチャーイブニングに参加しないと、お誘いを頂いた時、特に私が、海外の方と接することができる機会であることに関心を引かれ、参加することになりました。自分の英語能



焼き物倶楽部

力のなさをひしひしと感ずることになりましたが……。

発表のための準備にとりかかる頃、4回生の先輩は、就職活動のために手伝って頂けなくなり、1回生と2回生とで準備をしました。紹介をするには、自分達がよく

知らなくては、と様々な本に目を通しました。そしてなんとか、不足だと思ふ点もありましたが、発表に漕ぎ着けました。

発表では、たどたどしい英語での紹介を、みなさんに、自分の子供の発表を見にきたような温かい、熱心なまなざしで聴いて頂いて本当にうれしかったです。実例として私達の作品を見て触って頂いたのが、ほんの補足のみつもりでしたが、大変喜んで頂けて、又うれしくなりました。作品はとても未熟で、私達の倶楽部の恥のような物しか作ることができなくて恥ずかしかったです。

さらに私達は、個人として他の発表を見せて頂いたのですが、特に私が心を引かれたのが一番最後の踊りでした。どんなことを歌っているのか、よくわかりませんでしたが、メロディーや踊りを見ているだけで楽しく、会から帰ってからもしばらくメロディーを口ずさんだりしていました。

私は、1回生のうちからこんな機会に出会うことができ有難く思います。又、こういう機会があったなら、喜んで参加したいですし、もっと納得のいく作品をもって参上したいです。

この催しを、企画し、準備し、私達の面倒を見て頂いた方々に感謝したいと思います。ありがとうございます。

イ

ブ

ニ

ン

グ

神戸女学院大学 合気道会初演武

合気道会 E4 嵐裕美子

「女性学インスティテュートから10月のAWI会議で演武をしないかとお誘いがあり“やります!!”って言うておいたよ。」岡山県での夏合宿の時、顧問の内田樹先生(総合文化学科助教授)が私達にこうおっしゃいました。今だから申し上げますが、”そんなことちょっと無理だ!まだ発足して半年も経ってないクラブなのだから……”というのが率直な気持ちでした。我が神戸女学院大学合気道会は91年春からスタートしましたが、ほぼ全員が未経験者で、“合気道って名前は聞いたことはあるけれどどんなことするの”というメンバーばかりだったので。もちろん私も然りでした。通常は週3回稽古をしていますが、お昼休みという限られた時間である上、施設面で不自由も伴いなかなか思うようにできませんでした。夏合宿が終わり“AWI会議の演武どうなるかしら”



合気道会

と考えているのも束の間、前期試験が始まってしまいました。“テストが終わったら特訓だ!”という先生のお言葉もあり秋休みを返上して初演武に備えました。こうして迎えたカルチャーイブニングの当日は緊張感と“いつも通りにやればいいんだ”という割り切りの気持ちしかなかったように記憶しています。直前に軽い練習と最終の打ち合わせを行いいざ本番!!何と多くの外国人の方々の

視線と本学関係者の興味津々の表情!!

始めてみると技を忘れるわ、頭の中は真白になり足がもつれるわと惨々でした。普段は何気なくやっている技がかからない! まずい! どうしよう……と大変焦りました。ほとんど全員がこのような状態に陥り、後日先生も“さすがにあの時は一体どうなることかと思ったよ”とおっしゃっていた程です。やっと落ちつきを取り戻したと思っていたら終了!! このように拙い演武であったにもかかわらず終わると同時に盛大な拍手を戴き一同大変感激致しました。又カメラのシャッターをきって下さる音、フラッシュの数々にも驚きました。温かく見守って下さった観衆の皆様のおかげで何とかやり遂げることができました。末筆になり恐縮ですが、これ程のビッグチャンスを与えて下さった女性学インスティテュート及びAWI会議の関係者の方々そして畳の運搬等でお世話になりました施設課の方々に深い感謝の念とお礼を申し上げます。ありがとうございました。

三日間の異文化体験

13 岩森千明

千刈セミナーハウスでの三日間の滞在を終えて、家に帰ってから暫くはボーッとしていたのを覚えている。忙しかった日々から急に解放されて、虚脱状態にあったのかもしれない。いや、あれは一種のカルチャーショック状態であったような気がする。

AWI本会議のスタッフとしての参加ではあったが、アジア諸国の人々と接して、いろいろな異文化を体験することができた。今でも彼らとの様々な場面を思い出す。「大浴場になって恥ずかしくて入れない」と言っていた向こうの学生たち。三日目の夜には、「大きなお風呂って気持ちいい」と言って泳いでいたっけ。

「洗濯機の使い方が分からないから教えて」とあるインドの人。洗濯は召使がするからしたことがない、とのこと。インドの階級制を垣間見たような気がした。

パキスタンの女性の身なりについて尋ねた。「若い結婚前の女性には長い髪をしている人が多いの。その方が女らしく見えるから。服装は、絶対に体の線を出さないもの。ジーンズを履く時は、必ずその上にはだぶだぶのセーターなんかを着るの。」そうか、そんな彼女に日本の大浴場はすごいカルチャーショックだっただろうな。

レバノンの学生が自国の詩を披露してくれた。自分の国を賛美する感動的な詩だった。私も自分の国にそんなに誇りが持てるだろうか、と自問してしまった。

参加者は皆気さくな人達だった。夜にはどこからとも

なく皆集まってきて、ピアノを囲んで歌ったり踊ったりした。

たったの三日間、それも日本国内での交流であったが、私にとってアジア諸国が身近に感じるようになった。最近、これらの国々のニュースに敏感になっている自分に気付く。異文化体験は、何よりもその国の人々と直接交わることによって得られるものなのだ実感した。

AWI(The Asian Women's Institute)とは

アジア諸国(インド、パキスタン、フィリピン、レバノン、韓国、日本)のキリスト教女子大学13校からなる団体で、神戸女学院大学は1985年より加盟している。

昨年の秋(9月30日~10月5日)には本学がホスト校となり、「テクノロジー時代における女性と環境」というテーマのもと、AWI神戸会議が開催された。

1991年度AWI教員・学生交換プログラムについて

このプログラムはAWIがリーダーシップの養成と加盟校間の交流を目的として企画したもので、本学は昨年のAWI神戸会議開催にあわせて、インド、パキスタン、レバノンより教員・学生のグループ(6名)をキャンパスおよび千刈セミナーハウスに迎えた。本号ではこの時に実施された各種の交流プログラムに参加した学生ボランティア・スタッフおよびクラブの特集が組まれている。

しかしながら、このAWI交換プログラムは、昨年その前半部分が終了したばかり。今度は日本、韓国、フィリピンの教員・学生が、南・西アジア地区の加盟校を訪問・視察して全てのプログラムが完了する。実施時期はまだ確定していないが、はやければ来年には実施される予定なので、その時には本学の学生もぜひ参加してほしい。

(女性学インスティテュート)

ニュースレター特別号編集委員(順不同)

岩崎明子(E4) 岩森千明(I3) 近藤朋子(E4)
宮澤陽子(C4) 春名美和(E3) 黒田みのり(I2)
三島亜紀子(I2) 加茂わか(I2) 井上怜美(聴講生)
(E:英文学科 I:総合文化学科 F:食物学科 C:児童学科)